

時流の底流

東日本大震災と同時に発生した福島第一原発の事故。その被害の大きさに多くの市民が驚き、放射能という見えない恐怖におびえ続けている。原発震災から半年がすぎ、そろそろ「メディアは何をすべきか」を冷静に自問すべきではないか。その一つが、原発震災という未曾有の歴史を、もれなく記録・保存し、後世に残すことだ。それは、事故に関する各紙の縮刷版をつくることではない。記事の背景資料を含め、可能であれば、新聞社という垣根を越えて「原発震災アーカイブ」を設ける。アーカイブとは文書館のことで、そこに所蔵された文書には、

原発文書の消失許すな



奥津茂樹氏

日本だけでなく世界中の誰もが自由にアクセスできる。情報公開によって多角的な検証を得ることで、不幸な歴史の「真実」に迫ることができる。実現は容易ではない。しかし、これはメディアだけではなく、この時代に生きる私たち日本人の歴史的使命とでもいえるべきものだ。

非力なNPOにすぎない私たちが、「福島第一原発事故情報公開プロジェクト」を始めたのも、こうした強い思いに突き動かされたからだ。日本の情報公開制度はもちろん、米国の情報自由法も活用して、今回の事故だけでなく原発・エネルギー

政策に関する情報の公開を求め、それらを後世に伝えていきたい。

そして、プロジェクトのもう一つの狙いは、徹底的に公開請求することで国、自治体、電力会社もつ情報を捨てさせないことである。かつて日航ジャンボ機墜落事故に関する文書が大量に廃棄されたことがあった。そのような歴史の消失は二度とあってはなるまい。

「アーカイブ」の実現は歴史的な責任でもある。そうであるならば、これをメディアや市民の使命感だけに委ねるのではなく、政府や電力会社も役割を分担すべきだ。何をすべきなのかは、あえて言わない。責任の果たし方は、自分の頭で考えるべきだからである。|| 情報公開クリアリングハウス理事